

日本初の女流脚本家・水島あやめ

伊豆名 皓美

劇作家・故つかこうへいの代表作のタイトルでもある「蒲田行進曲」は、かつて東京都蒲田にあった松竹キネマ蒲田撮影所の所歌でした。ここで活躍し、日本初の女性映画脚本家といわれるのが、水島あやめ（本名・高野千年、1903～90年）です。

南魚沼郡三和村（現南魚沼市）で生まれたあやめは、母の実家が書店だったこともあり、幼い頃から本や雑誌が大好きでした。六日町尋常高等小学校在学中、『少女画報』に掲載されていた吉屋信子（新潟市生まれ）の「花物語」に出会い、小説家になる夢を抱きます。長岡高等女学校時代には、早くも雑誌や新聞に投稿が採用されました。卒業後は上京して日本女子大学師範家政科に入学し、母を呼び寄せて二人で暮らし始めました。

大学の機関誌に度々小説が掲載され、20歳で雑誌『面白倶楽部』の懸賞で小説「形見の絵姿」（ペンネーム・高瀬千鳥）が当選、全編掲載されました。大学4年生の時、小笠原映画研究所で本格的に映画脚本の書き方を学び始めました。この頃から、水島あやめというペンネームを使い始めます。在学中に執筆した脚本による映画『落葉の唄』は、女性脚本家第1号の映画になりました。さらに、あやめの脚本による映画『水兵の母』が大ヒットしました。こ

の映画の試写会には、高橋是清、犬養毅、東郷平八郎などが出席しました。さらに、大正天皇と皇太子（後の昭和天皇）もご覧になったといわれています。

大学卒業後、松竹キネマに入社。「母もの」を得意とし、女性から絶大な支持を得ました。憧れの吉屋信子が原作の『空の彼方へ』の脚本も担当し、映画の主演は日本初の映画女優・川田芳子（新潟市生まれ）が務めました。32歳で退職するまでの9年間で『お坊ちゃん』など20数本の映画の脚本を手掛けました。

退社後のあやめは、少女時代からの夢だった作家活動に専念します。雑誌『面白倶楽部』が主な発表の舞台になりました。『面白倶楽部』だけでも、附録本や連載を含めて1年間に20回も掲載されるといって売れっ子ぶりでした。東京大空襲被災のため故郷六日町に疎開し、終戦を迎えました。戦後、アンデルセン原作の『雪の女王』、スピリ原作の『アルプスの山の少女』を翻訳、マロー原作の『家なき子』、バーネット原作の『小公女』など子ども向けの翻訳を数多く手掛けました。また晩年は、新潟の新聞や雑誌に多くの随筆を寄稿しました。

前任の秋岡啓子さんから引き継ぎ、3年間連載を担当させていただきました。読者の皆様の声はとても励みになりました。これまでお読みいただいた皆様とスタッフの皆様に厚く御礼申し上げます。今後とも、にいがた文化の記憶館をよろしく願っています。



▲水島あやめ

【展覧会情報】

企画展示「日本初の女流脚本家・水島あやめ」（仮称）

会期：4月6日（火）から7月11日（日） 休館日：月曜日、5月6日（木）

※社会情勢の変化や新型コロナウイルスの感染状況の変化等により、会期や開館時間が変更することもございます。記憶館HPやFacebookなどで最新情報をご確認の上、ご来館くださいますようお願いいたします。